



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

謹賀新年

「インドに還る、インドに伝える」⑤

日本の仏教がインドに還るという話をしたが、われら現代日本人が、インドに伝えるもの、還すものがあるのか。

インドに伝えるものが、エアコン、冷蔵庫、自動車、新幹線などの科学的技術だけなら、なんとなく味気ない。そんなものは、インドがさらに発展すれば、あつと言う間に必要とされなくなる。IT技術ではインドの方が優れているかもしれない。

わが輩は未だにガラ系の携帯電話を使用しているが、困ったことに使えなくなるかもしれないと言われた。そうするとスマートフォンに替えなくてはならない。ちなみに、わが携帯電話はメールが受信できない設定になっている。あふれるつまらない情報に惑わされたくないからである。

わが輩は、とにかく電車に乗れば(優先座席)本を開く。最高の読書空間だ。ところが、どうだ。隣席で兄ちゃんや姉ちゃんが、一心不乱にスマホを触っている。覗いてみると、ゲームに夢中である。老いたる人が目の前に立っていても気付かない。

インドの通勤電車でもスマホをいじる人が増えてきた。かつては異邦人であるわが輩が乗ると、どこかからかの視線を感じたが、それを懐かしく思える残念な時代が、すぐそこまできている。

科学的技術以外に日本から伝えたものを幾つかを思い出してみる。まずはコトバ。リキシャはアジアを経由して日本から伝わった。リキシャ(人力車、輪タク)が発展してオート・リキシャ(電動三輪車)になった。

文化的なものでは、華道、茶道、盆栽、日本式庭園などがあげられる。しかし、インド文化に浸透しているとは思えない。

スポーツでは柔道、空手がある。柔道については、1905年タゴールの要請で柔道教師佐野甚之助(1882-1938)が渡印している。空手については、最初の教師は不明だが、わが記憶に残る空手普及の貢献者は、秋田県の佐々木商一(1946-2017)である。現在インド人の空手教師が中学校などを巡回指導するまでになった。

絵画では、岡倉天心が1902年10月30日インドより帰国。1903年1月に横山大観、菱田春草の二人をインドに送った。ベンガルの絵画に影響を与えたと言われている。

ウッペンドラ・マハーラティ（1908-1981）は大の親日家である。彼は1925年カルカタ芸術学校に入学、1954年から一年間日本に滞在した。彼の画法には日本画的要素がみられる。昨年10月マハーラティ回顧展が、デリーの官営ジャイプル・ハウスで催された。モディ首相も来館し、作品の前でたたずみ鑑賞したという新聞記事が載っていた。

わが輩は作品に感動したのみならず驚いたことがある。彼が使用していた絵具・パレットなどの画材は、日本製であった。わが輩がサラリーマン時代（貿易部）に、少量ながら同画材をインドに輸出していたものである。マハーラティ画伯に一度会ったことがあるが、その事実を今日まで知らなかった。敬意と親しみが一気にわきあがって来た。

健康法といえばヨーガを想起するが、最近日本の「楽健法」をインドに伝えようとしている人たちがいる。この会の創始者は山内宥巖師（真言宗僧侶）である。通称「二人ヨーガ」とも言われる。わが輩は「足ヨーガ」と言うが、足でツボをほぐしていくユニークな健康法である。インドでの普及には問題点がある、と思える。足は不浄な部位になる。下位の者が上位の御足に触れるのはよいが、その逆は問題となる。もちろんアーユルヴェーダにも足で施術するものがあるが、施術師なら許される。しかし病院等の施設でオイルまみれになるので大衆的ではない。「楽健法」はどこでも誰でも、カーストに関係なく二人いればできる。

インドでうけるのか。これが意外や意外受けたのである。あるグル（教祖）は、大のファンになった。最近「グルの楽健法」と称している。

わが輩の身近にインド政府から賞を頂いた方が五名いる。この一ヶ月の間に、その内の四名に出会った。インド・日本の文化交流に尽力した人たちである。

その内の一人はヨーガ普及に尽力しモディ首相賞を受賞した。ヨーガといえばインドが本場、仏教のように世界に広まった。ヨーガはこころと身体健康法でもある。セラピーの側面もあるので、民間療法ではなく、科学的見地が必要になる。このグループは、チェルノブイリー原発事故被災者を対象として、しばしば現地指導に赴いている。この発想は、注目に値する。なぜなら没我的になりがちなヨーガを「大衆」への奉仕に向けようとしているからである。

この“大衆ヨーガ”がインドに還るには、何が必要か、が今後の課題となるであろう。

ヨーガにしる、文化にしる、Nichirenのように壮大な発想と思想を今年は期待したいものである。